

〈一般投稿論文〉[研究論文]

笑いと言説のシナリオによる共通基盤化プロセス —女性多人数会話の談話分析—*

児 島 麦 穂

大阪大学大学院

This study explores the process of building common ground in multi-party conversations among women. In particular, this article examines how laughter and hypothetical scenarios function in the mutual understanding of participants. The results showed that when listeners fail to understand the speaker, the speaker builds a hypothetical scenario to clarify the meaning. Then, listeners respond with laughter to demonstrate their understanding. Therefore, laughter and hypothetical scenarios were found to support and enforce interactional understanding in the process of building common ground.

キーワード： 共通基盤、笑い、言説のシナリオ、女性多人数会話、談話分析

1. はじめに

本研究は、20代の女性友人同士による多人数会話において観察された共通基盤化プロセスを明らかにするものである。特に、本研究で扱うデータでは共通基盤化プロセスにおいて、笑いの発生と言説のシナリオ(hypothetical scenario)(Georgakopoulou 2001)の構築が観察されたため、共通基盤化、笑い、言説のシナリオの関連性を談話分析により明らかにすることが本研究の目的である。笑いはこれまでの研究において、ラポールを構築する機能、会話の進行を円滑にする機能、笑いの対象を傷つける機能などを持つことが明らかにされている(Boxer & Cortés-Conde 1997; Holt 2013)。本研究で扱う笑いは、joke-telling(Sacks 1974)のように会話の場以前にある程度流れが構成されている出来合いの語りをきっかけとして発生する笑いではなく、conversational joking(Boxer & Cortés-Conde 1997)のように偶発的な語りをきっかけとして発生する笑いを含む相互行為で

* 本論の執筆に際し、建設的で有益なご助言をくださった査読委員の3名の先生方、そして継続的に貴重なご指摘を下された指導教員の秦かおり先生に心から感謝申し上げます。本稿のデータ3、4は、「社会言語科学会第44回大会」における口頭発表の内容に大幅な加筆・修正を施したものである。なお、本稿における不備や誤りは筆者に帰する。

ある。このような笑いが本稿で扱うデータにおいて、前後の相互行為にどのように影響を与えるのか、その中で笑いのどのような機能・性質が観察されるのかを明らかにする。

また、仮説のシナリオ (Georgakopoulou 2001) とは、「もし X が起こったとしたら／起こったと仮定して」展開する、実際には起こっていない出来事のシナリオである。仮説のシナリオを語るにより、参加者をそのシナリオの登場人物とし、シナリオの内側からその状況を判断させる機能があることが明らかになっている (Georgakopoulou 2001: 1892-1893)。

本研究では女性多人数会話を扱い、このような機能、性質を持つ笑いと仮説のシナリオの構築を通して、参加者間の相互理解が達成される様子を共通基盤 (common ground) (Clark 1996) の観点から分析する。これにより、1) 共通基盤化のプロセス及び仮説のシナリオの構築において笑いがどのように機能するか、2) 女性多人数会話においてどのような共通基盤化プロセスが行われるか、の2点を明らかにするために、分析を行っていく。

2. 先行研究

2.1. 笑いの機能・分類について

これまで笑いの機能や分類について多くの研究が行われてきた (Sacks 1974; 水川 1993; Glenn 2003; 三宅 2011; 中河 2016)。中でも志水ほか (1994) は、日本語での笑いを以下のようにまとめ、(1) 快の笑い、(2) 社交上の笑い、(3) 緊張緩和の笑いがあるとしている。その内、社交上の笑いを (2)-1 協調の笑い、(2)-2 防御の笑い、(2)-3 攻撃の笑い、(2)-4 価値無化の笑いに下位分類している。本研究で観察されたのは、特に (2) 社交上の笑いであり、参加者同士で笑い合うことにより会話の場における協調を構築する (2)-1 協調の笑いが多く観察された。

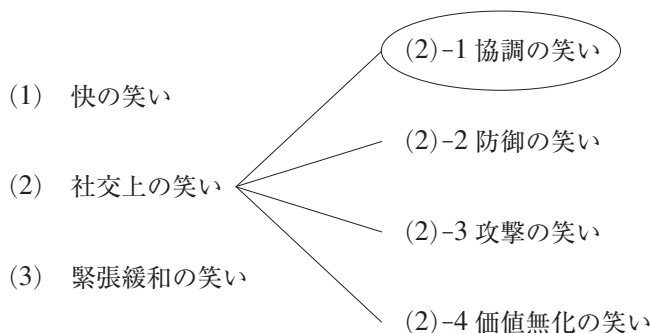


図1. 志水ほか (1994) における笑いの分類

また、早川 (2000a) は笑いを、A 仲間作りの笑い、B バランスを取るための笑い、C 覆

い隠すための笑いに分けている。その中で A 仲間作りの笑いを、A-1 話題共有期待の笑い、A-2 共有表明の笑い、A-3 共通認識に基づく笑いに下位分類し、A-1 と A-2 の笑いが繰り返されることにより共通理解が構築され A-3 の笑いが発生すると分析した。このような A 仲間作りの笑いは、親しい間柄の雑談において多く発生する（早川 2000b）ことが明らかにされているように、本研究で扱う女性友人同士による私的な会話においても多く観察された。さらに、笑いが繰り返されることにより共通理解が構築される笑いの性質も本研究での共通基盤化プロセスに大きく関わっている。

日本語のデータを扱い笑いの機能を明らかにした研究として、Murata and Hori (2007) は笑いの意味機能を (1) 冗談や事実としてのおかしさや認識のズレなどから生じるおかしみ、楽しみ、(2) 命令、依頼、提案、批判などの緩和、(3) 沈黙回避、照れ、緊張緩和としてのフィラー、(4) 賛同のあいづち、(5) 聞いているというシグナル、(6) 特に面白みのない発話への反応の 6 種類だとしている。また、Namba (2011) は聞き手行動としての笑いに注目し、聞き手の笑いが (1) 共感、理解 (sympathy/understanding)、(2) ユーモアによる対処 (humorous treatment)、(3) 緩和 (mitigation)、(4) 回避 (evasion) の機能を持つことを明らかにしている。このような機能を持つ笑いをを用いることで聞き手は、話し手の状況や話の内容に共感、理解を示したり、話し手による失敗を深刻なものではなくユーモラスなものとして（からかいなどにより）対処することで、話し手のストレスを緩和したり、答えにくい質問を回避したりすることを分析している。

これらの先行研究において分類と機能としてあげられている笑いの特徴の内、本研究で注目するのは、特に共通基盤化プロセスにおいて参与者が互いの発言を理解し、また理解していることを示すことに貢献する笑いである。つまり、ある発言や語りを理解したことを示す、おかしみへの反応としての笑い (Murata and Hori (2007) による (1) の機能) と、賛同・共感・理解を示す笑い (Murata and Hori (2007) による (4)、Namba (2011) による (1) の機能) である。それらの笑いがどのように共通基盤化プロセスに関連するのかを笑いと前後の時間的プロセス、置かれた場所の環境、参与者の関係性や立ち位置などといった笑いの周辺的な要素を含めて詳察する。また、このような社交上の笑い (志水ほか 1996)、仲間作りの笑いとして分類される笑いが行われることにより、会話参与者らが円滑な人間関係を維持するための協調性を構築する相互行為を明らかにする。

2.2. 共通基盤化について

共通基盤 (common ground) (Clark 1996) とは、人がコミュニケーションを行う際に、相互的に理解するために必要な相手と自分の背景知識の基盤である。共通基盤には「コミュニティ型共通基盤 (communal common ground)」と「個人型共通基盤 (personal common ground)」がある。コミュニティ型共通基盤は、同じコミュニティに所属するために共有している知識が含まれ、個人型共通基盤には共通の経験により得た共有の知識が

含まれる (Clark 1996: 92-121)。会話参与者たちの共同行為 (joint action) により、共通基盤が確立されることを共通基盤化 (grounding) と言う。

この Clark (1996) を受け、田中 (2019) では共通基盤化の段階を以下のように示した。

Phase 1	話し手の自己中心的 (egocentric) な局面 (エラーが起こりやすい)。
Phase 2	聞き手による修復や指示対象の検索が行われる局面。
Phase 3	話し手が聞き手デザインを駆使したり、聞き手が推論・連想などによって会話の共同構築が行われる局面。
Phase 4	最終局面。共通基盤化の完成。

表 1. 共通基盤化に至る 4 つの phase (田中 2019: 21)

これらの段階を基準として相互行為を観察することにより、相互行為内で起こる共通基盤化の詳細な分析が可能となる。また、田中 (2019) は共通基盤化が起こるタイミングはそれぞれの事例によるものであり、全ての相互行為でこのような 4 つの局面が観察できるとは限らず、基盤化に至るまである phase の中に別の phase が入れ子型に発生することもあるとしている。また、参与者間で相手が理解してくれるという見込み (presumption) に基づいて相互行為が行われる傾向にあるとまとめた (田中 2019: 21-24)。

Kecskés and Zhang (2009) は共通基盤を「核となる共通基盤 (core common ground)」と「創発的共通基盤 (emergent common ground)」に分類し、これら 2 種類の語用論的・認知科学的な共通基盤がコミュニケーションにおいて存在しているとした。「核となる共通基盤」とは、会話参与者個人が会話開始以前から保持している心的表象であり、これには常識的知識・文化的知識・言語的知識 (Kecskés and Zhang 2009: 347) が含まれる。「創発的共通基盤」は会話内で発生したエラーが相互行為の結果、解消され参与者らにより共同構築される。山口 (2019) は Kecskés and Zhang (2009) と田中モデル (田中 2019) を援用し、英語を母語として使用するアメリカ人話者と、日本語を母語、英語をリンガ・フランカとして使用する日本人話者の間で発生した英語での会話における共通基盤化プロセスを分析した。その中で、アメリカ人話者らが文化的知識により「核となる共通基盤」を持っていたために限られた指示表現で理解し合う様子と、当初理解していなかった聞き手としての日本人参与者が、話し手であるアメリカ人参与者による修復を経て「創発的共通基盤」を構築し、理解に至るプロセスを明らかにした。

さらに秦 (2019) は、偶発的に発生した折り紙を折るというタスク遂行型の多人数会話を共通基盤化の観点から分析している。この分析では、phase 1 で起こった参与者のポジショニングに関するエラーが、phase 2 においてエラーを起こした当事者でない者により修復され、phase 3、4 で基盤化が起こると参与者たちの発言にオーバーラップや先取りが起こることを明らかにしている。このように、オーバーラップや先取りが可能になるのは、共通基盤が確立されることにより、参与者らが互いの予測 (presumption) に基づい

て発言を行なっているためだと分析している。この研究から多人数会話において、タスク遂行、共通基盤化、エラー修復が複数の参与者により入れ子式に行われることが明らかとなっている。

これらの先行研究をまとめると、通常、参与者らは互いが保持していると予測した共通基盤に基づいて相互行為を行なっている。もしその予測が過小／過大評価であり、基盤化に至らなかった場合、聞き手による検索や修復が行われ、その後話し手による聞き手デザインや、聞き手による推論などが行われ共通基盤が確立される。これらの共通基盤化に至る過程において、エラー修復やタスク遂行などが入れ子式に行われる。

本研究では笑いと共通基盤の関係性を以下のように考える。参与者は自身が持つ経験に基づいてある対象への意見や視点を持っており、それが個人の中で基盤となっている。この基盤に基づいて人は、何らかの発言や出来事に対しおかしみを感じ、笑いで反応する。笑いは、それ以前の発話を理解したことを示す (Murata and Hori 2007; Namba 2004) だけでなく、笑いの対象に関する背景知識を保持していること (Sacks 1974; Glenn 2003) を示す。そのため笑いを共有する際、参与者らはある程度共通基盤を確立していると言える。また児島 (2019) では、共通基盤化が行われた後に発生する笑いが共通基盤化を確認・強化する機能を持つことを明らかにしている。しかしながら、上述の Murata and Hori (2007) が笑いの機能の1つとして挙げている「特におかしみのない談話管理上の笑い」や、特におかしいことがないにも関わらず参与者らが笑い合うことで会話の場で協調性を表出する「共鳴する笑い」(井出ほか 2018) など明らかにされている様に、ある発言に対して笑いで反応することは必ずしもその発言が持つ意見への理解、同意を示すわけではない点に留意する必要がある。

さらに、秦 (2019) が分析を行ったデータと同様に本研究で観察されたデータでは、仮説のシナリオの(協働)構築、笑いの発生／共有、共通基盤化の確立が入れ子式に、つまり共通基盤化に至る途中に、仮説のシナリオが構築され、笑いが発生／共有される様子が観察された。先行研究で明らかにされているように仮説のシナリオは、話し手が語る状況を詳細に描きだし (Georgakopoulou 2001)、笑いの共有は参与者らの理解の状態を示すことから、これらが参与者らの相互理解に関係すると予測できる。そのため、仮説のシナリオの構築と笑いの共有が共通基盤化プロセスにどのように表出し、共通基盤化にどう働きかけるかを本データの分析により明らかにする。

3. 研究方法

3.1. データについて

本研究では、研究者が2018年に開始した継続・縦断調査の一環として、2019年8月に収録した女性友人同士の自然談話をデータとし談話分析を行った。同じ被調査者を対象

に毎年調査を行うことにより、時間的な変化や社会情勢の変化が女性らの日常的な会話にどのような影響を与えるのかを解明することが継続・縦断調査の目的である。収録の際には、研究者が不在の環境にビデオカメラとレコーダーを設置し、自由に語るよう依頼した。データ収録場所は関西の飲食店であり、参加者らは飲食しながら会話をしている。このような状態で友人同士の会話を収録することにより、仲間内の私的でカジュアルな笑い発生を含んだ相互行為の観察が可能となった。会話参加者らは同じ高等学校に通っていた、現在 20 代半ばの女性らであり、データ収録時点では全員関西の会社に勤務している。

会話 参加者	年齢	職業	性別	関係	備考	データの 長さ
MN	24	会社勤務	女性	高校時代の同級生。同じ部に所属し、活動していた。	転職活動の経験あり。 データ収録直前に婚約した。	28分17秒
KF	24				転職活動の経験なし。 人事部勤務。	
YT	24				転職活動及び 転職の経験あり。	
KH	25				転職活動の経験なし。	

表 2. データの会話参加者基礎情報

3.2. 分析枠組み

本研究は談話分析の方法として、相互行為のナラティブ分析の流れをくむ Bamberg (1997, 2004) らを参考にする。Bamberg (1997, 2004) は、ナラティブは過去に経験した出来事の再現ではなく、会話が行われる場において実践される相互行為であるとし、参加者が行うナラティブの意味を理解するために、そのナラティブがどのように語られ、何を目的として語られているのかを分析している。本研究では、女性友人同士の会話において行われる発言がどのように行われているのか、それに笑いが伴うことにより、その発言が何を意味し、相互行為上で何を実行しているのかを分析する。また、談話分析の方法で共通基盤化プロセスを分析することにより、笑いの共有や仮説のシナリオの構築がどのように参加者らの相互理解に繋がるのかを詳察し、明らかにする。

4. データと分析

4.1. 「死なれたら困る」を巡る共通基盤化プロセス

本節で扱うデータの参加者の 1 人である MN は収録直前に婚約しており、彼女が婚約に到るまでに別れようと思ったことはなかったのかと YT が質問を行った（抜粋場面外）

ことをきっかけとして、データ 1、2 の会話が発生する。その中で、MN は交際相手に「死なれたら困る」と思ったため婚約することに決めたと語るが、当初この発言がどのような状況を示しているか、他の参与者らに理解されない。データ 1、2 において仮説のシナリオと笑いの共有を含む共通基盤化プロセスが行われることにより、婚約前の状況や心情が共有され、MN の発言が他の参与者らに理解されていく過程を共通基盤化の phase モデル（田中 2019）に当てはめて分析する。

4.1.1. 共通基盤化プロセスの開始

データ 1 では、MN が「交際相手に死なれたら困るから婚約を決めた」という発言を行い、それを KF が誤って解釈していることが明らかになる。この解釈の誤りを修正し、MN が具体的にどのような経験をしたのかが共有される共通基盤化プロセスの開始部分を分析する。

[データ 1]

86. MN: じゃあもう別れますって言った時に:
 87. じゃあもう MN (.) と付き合いへんねやったら:
 88. 生きる意味ないわ: みたいな
 89. ¥ 死ぬみたいなこと言われて: ¥¹
 (中略)
123. MN: わ: ちょっと死なれたら (.5)
 124. ¥ 困るな [と思って: ¥
125. YT: [ha[haha
 126. KH: [hahaha
 127. YT: ((頷く))
128. KF: [KF-
 129. [((左手を挙げる))
130. MN: [¥ ど: ないしよ: みたいな ¥
131. KF: [₁ KF の友達も:] なんか (.6)
 132. [₁ ((左手で MN の方を指す))]
 133. [₂ この人が: (.6) 死なれたら困るかどうかで]
 134. [₂ ((左手を前に出す))]
 135. MN: [₂ ((頷く))
- phase 1
 (MN 「死なれたら困る」に関
 して)
- KF の友人に関しての共通基盤化プロセス (131-175 行目)
- 131-136 行目
 phase 3 → 失敗
 (MN 「死なれたら困る」に
 関して)
- phase 1 (KF の友人に関して)

¹ MN による 89, 124, 130 行目の発言に笑いが伴っているのは、自分の過去の状況に自らおかしみを感じていると同時に、そのような状態にあった自分と交際相手の状態を恥ずかしく感じ、それを他の参与者らに開示する際の緊張を緩和 (Murata and Hori 2007; Namba 2011) するためであると考えられる。

136.	KF: 結婚決めたって言ってたで	
137.	(.5)	
138.	YT: [え :¥ えええ :¥	
139.	MN: [え ::	
140.	そうなんや : =	
141.	KF: = うん	
142.	(.8)	
143.	MN: え, じゃあ逆に : あ, じゃあ	
144.	[どうぞ死んでくださいって ¥ 思ったら : ¥hh ²	
145.	[((右手を前に出す))	
146.	(.5) [¥ 別れてみたいいな ? ¥	
147.	[((右手を振る))	
	(中略)	
158.	KF: なんかその : いっちゃ大変で,	
159.	介護とかもやっていけるか (しゃーなし) みたいな	
160.	YT: ん [::	
161.	MN: [ん ::	
162.	MN: [((頷く))	
163.	KF: ぐらい思う人じゃないと :	
164.	MN: [うんうんうん	
165.	[((3 回頷く))	
166.	YT: まあな :	
167.	MN: まあそら [そやな	
168.	KF: [死なれたら困るな : みたいな	
169.	YT: ((頷く))	
170.	KF: しょうみ : [あんま別に大したことないんやけど :	
171.	[((目線を上にあげる))	
172.	死なれたら (.) ちょっと困るな : [みたいな	
173.	YT: [うんうんうん	
174.	MN: [う :: ん :	
175.	それは [(あると思う)	

phase 2 (KFの友人に関して)

phase 3 (158-175 行目)
(KF の友人に関して)

86 行目から MN は過去に交際相手と別れようとした際に、相手から別れたら死ぬと
いった内容のことを言われたと明らかにし、そのような発言を行う交際相手に「死なれた

² 144, 146 行目の MN の発言に伴っている笑いは、交際相手に「どうぞ死んでください」と思う
ような状況は通常考えられないため、自身の発言に自らおかしみを感じ、発生したと考えられる。

ら困る」(123-124 行目) と思ったと述べる。これに YT と KH は笑いで反応 (125,126 行目) しており、ここでの笑いは、MN の「死なれたら困る」と言う発言に YT と KH がおかしみを感じたために発生したと考えられる。このような笑いは通常、聞き手が話し手の発言を理解したことを示す笑いとして機能するため、この時点で YT と KH は笑いで反応できる程度には、MN の発言を理解していた、もしくは理解していると思っていたと言える。しかしながら、その後 KF が「KF の友達も (中略) この人が:(.6) 死なれたら困るかどうかで結婚決めたって言ってたで」(131,133,136 行目) と発言したことをきっかけとして、聞き手 (特に KF) が MN の当初の発言を十分に理解していなかったこと (エラー) が露呈し、その後 MN が具体的にどのような状況で恋人に「死なれたら困る」と思ったのかに関する共通基盤化プロセスが開始される。

このような経緯により開始した MN の「死なれたら困る」という発言を巡る共通基盤化プロセスにおいて、MN による 123-124 行目は話し手の自己中心的な局面である phase 1 だと言える。その後、KF は「KF の友達も (中略) この人が:(.6) 死なれたら困るかどうかで結婚決めたって言ってたで」(131,133,136 行目) と発言する。これは、交際相手に「死なれたら困る」という MN の発言を、KF の視点から解釈し、自分の友人の話を引き合いに出すことで、MN の発言への理解を示そうとする行為である。そのため、これは聞き手が推論・連想などを行うことによって、参与者らが会話の共同構築を行う局面である phase 3 を KF が試みたと考えられる。しかしながら、データ 2 の場面で明らかになるように、この KF による「死なれたら困る」の解釈は MN が意味する内容と異なっているため、KF による phase 3 の局面は達成されない。このような展開により、MN の「死なれたら困る」という発言がどのような状況を示しているのかに関する共通基盤化の途中であるが、138 行目以降、KF が言及した友人のエピソードを理解するための共通基盤化プロセスが入れ子式に発生する。

KF による「KF の友達も (中略) この人が:(.6) 死なれたら困るかどうかで結婚決めたって言ってたで」(131,133,136 行目) という発言に、YT と MN が「え:¥えええ:¥」(YT,138 行目)、「え::: そうなんや:=」(MN,139-140 行目) と反応し、さらに MN が「じゃあどうぞ死んでくださいって¥思ったら:hh (.5) 別れてみたいいな?¥」(143-144,146 行目) と KF に対して質問を行っている。YT による「えええ:」(138 行目) という驚きの感嘆詞や、MN による「そうなんや:」(140 行目) という反応は、KF の友人に関するエピソードが YT と MN にとって予想外の情報であったことを示している。また MN によるエピソードの詳細を確認する質問 (143-144,146 行目) は、MN が KF の友人のエピソード (131,133,136 行目) の内容を十分に理解していないことを示しているため、参与者間でこれを理解するための共通基盤化プロセスが発生する。このプロセスにおいて、まず KF が友人の話題を開始する発言 (131,133,136 行目) が phase 1 の自己中心的な局面となり、YT・MN による反応と質問 (YT:138, MN:139-140,143-144,146 行

目) が phase 2 の聞き手による指示対象の検索が行われる局面であると言える。KF の友人についての話題が元々、MN の「死なれたら困る」という発言を理解するために差し込まれたエピソードであることを考慮すると、ここでの KF の友人の話題に関する共通基盤化は、KF の友人が具体的にどのような状況で交際相手に死なれたら困ると思ったのかに加えて、KF の友人のエピソードがどの程度 MN が交際相手に「死なれたら困る」と思った状況と関連しているのかを明らかにするためのプロセスでもあると言える。

これらの点を参与者間で理解し合うために、KF は phase 3 の話し手が聞き手デザインを駆使する局面として、KF の友人がどのような状況で交際相手の死なれたら困ると思ったか説明を行う。KF は、友人が交際相手に対して（将来）「介護とかもやっていける」（159 行目）、「大したことないんやけど：死なれたら（.）ちょっと困るな：」（170,171 行目）と感じたため婚約を決めたい、という KF が知る範囲での情報を付け加える。この説明に YT と MN は頷き（162,165,169 行目）と相槌（164,173 行目）を打つことで反応する他、「まあな：」（YT,166 行目）、「それは（あると思う）」（MN,175 行目）と合意を示しており、phase 3 としての参与者間での会話の共同構築も達成されている。このように KF は、「友人が介護が必要になるほど先の未来のことも見据えて、交際相手と一緒に生きていきたいと思えたために婚約を決めた」という具体例を示すことで、KF の友人がどのような状況で「死なれたら困る」と思ったのか説明を行った。この説明により、聞き手である参与者らが KF の友人のエピソードの内容および、KF がなぜ友人の話題を引き合いに出したのかを理解したと言える。これは交際相手に「死なれたら困る」（123-124 行目）と思ったという MN の当初の発言を、KF がどのように解釈したかを明らかにするものであったため、これがこの後の MN の発言に関する共通基盤化プロセスに繋がっていく。

4.1.2. 仮説のシナリオの構築と聞き手の笑いによる共通基盤化の達成

本場面では、データ 1 で KF が引き合いに出した友人のエピソードが、MN が経験した状況と異なっていることが露呈し、MN が「どのような状況で交際相手に死なれたら困る」と思ったのかを仮説のシナリオを用いて説明する。その過程で笑いがどのように機能し、共通基盤化に繋がっているのかに注目し、分析を行う。

[データ 2]

- | | |
|---|--|
| <p>180. KF: ¥ ということちゃう ?¥haha</p> <p>181. MN: aha¥ ということなんかな ?¥</p> <p>182. KF: haha¥ 死なれたら [困るって言ったやん ¥</p> <p>183. [((MN を指差す))</p> <p>184. MN: いや、[それ言われた時に :</p> | <p>phase 2 (180,182-183 行目)</p> <p>(MN 「死なれたら困る」に
関して)</p> |
|---|--|

KF がどのように MN の発言を解釈したかが共有されていた。KF はこの共通基盤化した KF の友人の例を「そういう」と指示代名詞で指し、180 行目で「¥そういうことちゃう ?¥haha」と MN に尋ねる。これは、MN がどういった状況で交際相手に「死なれたら困る」と思ったのか、それが KF が語った友人の例と一致しているのかを確認する質問である。この質問が合図となり、参与者らの会話は KF の友人についての語りから、MN にとっての「死なれたら困る」がどのような状況を指すのかに関する共通基盤化プロセスに戻ったと言える。この KF の質問に MN は、「¥そういうことなんかな ?¥」（181 行目）と KF と同様に指示代名詞「そういう」を使用することで KF の友人のエピソードをデータ 1 での共通基盤化プロセスで理解したことを示しつつ、KF の確認に合意しない。そのため、KF は「haha¥死なれたら困るって言ったやん¥」（182 行目）とデータ 1 での MN の発言に言及することで再度確認を行う。これらの KF による確認は、共通基盤化プロセスの phase 2 であり、KF の解釈が MN の意味するところと一致しているかの検索が行われており、これに MN は合意していないため、KF が聞き手として行った MN の「死なれたら困る」に関する解釈が誤っていることが示唆される。

その後、MN は「いや」（184 行目）と KF の発言への否定を行い、自身の過去の心情を仮説のシナリオ (hypothetical scenario) (Georgakopoulou 2001) として語ることで、詳細に説明していく。MN は、交際相手が自分と別れたことが理由で死んだという現実には起こっていない出来事を仮定し、その場合「向こうの親が」（187 行目）、自分を「絶対恨む」（189 行目）とシナリオを構築すると、KH と YT は共起する笑い（191,192 行目）で反応する。その後 MN が笑いながら「¥お前のせいで死んでん¥」（193 行目）、「うちの長男みたいな」（195 行目）と交際相手の親の架空の言動を描くことでシナリオを展開し、交際相手と別れることで周囲から責められるような状況を避けたいと思ったと説明する。さらに 201、204 行目では、もし交際相手が死ぬようなことがあったら、自分の問題でもあると思ったことから、彼と別れずに婚約することにしたと説明を締めくくる。これに、YT と KH は笑い（194,200 行目）や頷き（198 行目）で反応し、KF は「そこまで考えたんや」（196 行目）と、MN が語った仮説のシナリオの状況に驚きを示す。YT は 203、207-208 行目でも、何度も頷きを示しながら「うんうんうん」と発言を行なっていることから、MN の当時の状況や心情に大きく理解を示していると言える。

この 184 行目から 208 行目までのやりとりは、MN の「死なれたら困る」という発言に関する共通基盤化プロセスの phase 3 であると言える。データ 1 での友人のエピソードで露呈した KF の誤った解釈を修正するために、MN は仮説のシナリオとして過去の心情を描くことで、交際相手に「死なれたら困る」と思うに至った状況を他の参与者らに伝える。仮説のシナリオは、聞き手にシナリオの内側から状況を判断させる機能を持つ (Georgakopoulou 2001) ため、他の参与者らは MN が経験した状況をより鮮明に想像することが可能となった。そのため YT と KH の笑い（191,192,194,198,200, 行目）と KF

の発言（196 行目）は、MN が語る仮説のシナリオへの聞き手としての反応であり、彼女らが内容を聞き理解し、その内容に対しておかしみや驚きなどの感情を覚えたことを示していると言える。これにより、YT・KH・KF は、MN がどのような状況で交際相手に「死なれたら困る」と思ったのか、それがなぜ婚約のきっかけとなったのか理解を深めたと分析できる。

この場面において笑いは、聞いているというシグナル、おかしみへの反応（Murata & Hori 2007）、理解を示す行為（Namba 2011）として機能していると言える。ここでの笑いは、架空とはいえ「MN の交際相手が死んだとしたら」という重い内容のシナリオであるにも関わらず、MN の関心事が「相手の親から恨まれたくない」という予想外のものだったことに YT と KH がおかしみを感じたため発生したと推測できる。このような YT と KH の笑いの後に、MN も笑いながら仮説のシナリオを続けている（193 行目）ことから、MN も YT と KH の笑いによる反応を相応しいものとして認め、シナリオが笑いを生じさせるようなおかしみを持つことを自ら認めていると考えられる。つまり、phase 3 の会話の共同構築の局面において、聞き手による笑いが MN の仮説のシナリオへの反応として行われることにより、聞き手の理解が示され参与者間の合意が達成されていた。これにより本場面で観察された 191-194, 198, 200 行目の笑いが共通基盤化の補助を行っていたと分析できる。本場面での仮説のシナリオとその反応から成る共通基盤化プロセスにより、MN が「もし MN と別れたことが理由で交際相手が死ぬようなことがあったら、相手の周囲の者から責められるかもしれない、相手の死が他人事と思えない」という意味で「死なれたら困るから交際相手との婚約を決めた」という発言を行ったことが参与者間で相互的に理解されたと言える。

218 行目以降 MN が、「もし別れたとしたら死ぬ」といった発言をする交際相手を面臭いと感じ、別れようと思ったこともあると述べると、YT は「わかる、も、めんどくさいし自分がしんどいしみたいな＝」（223, 225 行目）と発言し、これにラッチングで MN は「＝な：そう」（226 行目）と同意する。この YT による発言は、MN の当時の心情への理解と共感を示し、代弁するものである。これは、YT が MN の過去の心情を想像できる程度に MN の婚約以前の状況に関して理解していることを示す発言であることから、MN の「死なれたら困る」という発言を巡って確立しつつある共通基盤を確認、強化する発言であると言える。また KF は 224 行目で、「いいやん、それくらい重い方が良くない?」と発言を行っている。これは KF が MN の当時の状況に関して語られた内容を理解していないというわけではなく、ある程度理解した上でその状況を自分の視点から見て、それは自分にとって許容範囲であるという意見を述べる行為であると考えられる。そのため、本稿では分析を行わないが、この後の会話では参与者間で「交際相手が重い方がいいかどうか」を巡る意見の交渉が行われていく。

本節での分析を以下にまとめる。データ 1、2 では、参与者らの間で MN の「交際相手

に死なれたら困ると思ったことが婚約の決定打となった」という発言をきっかけとして、婚約前の MN が経験した状況がどのようなものであったかに関して、参与者らが理解を深めようとする共通基盤化プロセスが観察された。その中で KF は、MN の発言を解釈し、関連性のある話題として KF の友人のエピソードを持ち出すことで MN の発言を理解したことを示そうとする。しかし、KF の友人がどのような状況で交際相手に「死なれたら困る」と思ったのかに関する共通基盤化プロセスが、MN の発言を理解するための共通基盤化プロセスに差し込まれる形で発生したことにより、KF は MN の発言を正しく解釈していなかったことが明らかになった。そのためここでの KF による phase 3 は達成されなかった。その後この解釈のずれを修正するために、MN が婚約以前の自身の心情を仮説のシナリオとして語ることで、「死なれたら困る」と思った状況を具体的に描く。他の参与者はこのシナリオによる説明に笑いと驚きで反応し、理解を示したことから phase 3 である会話の共同構築が達成された。これにより MN が「もし交際相手が亡くなったとしたら、それは自分の問題でもあると思ったため、婚約を決めたこと」、婚約を決めたものの「自分と別れたら死ぬというような発言を行う交際相手を面倒であると感じていること」が参与者間で理解され、共通基盤化した (phase 4) と言える。

このプロセスにおいて、仮説のシナリオと笑いによる反応が共通基盤化を補助していることが観察されたが、データ 1、2 で観察された笑いが全て共通基盤化に繋がっていたわけではない。例えば、データ 1 で最初に MN が「死なれたら困る」(123-124 行目) と発言した際に、YT と KH は笑いで反応 (125-126 行目) している。ここでの聞き手 YT, KH による笑いは、MN の「死なれたら困る」という発言を理解したことを示す笑いとして機能するはずであり、笑いの発生が話題の転換のポイント (水川 1993) となりうることを考慮すると、MN はどのような状況で恋人に「死なれたら困る」と思ったのかに関する共通基盤化プロセスが発生することなく、126 行目以降別の話題へ移行することも可能であったと考えられる。しかしながらその後 KF が、友人のエピソードを持ち込んだことをきっかけとして共通基盤化プロセスが行われると、YT と KH は、MN の「死なれたら困る」という発言を十分に理解していなかったことが明らかになる。そのため結果的に見れば、YT と KH による 125-126 行目の笑いは、MN の「死なれたら困る」という発言を理解したと思い込んで行われた笑いであると言える。また、データ 2 の 180 行目から 183 行目の KF と MN の発言が笑いながら行われているのは、互いの認識や解釈が異なっていることを提示する際に発生するストレスの緩和 (Namba 2011) として機能したと言える。

本データにおける共通基盤化プロセスで発生した笑いの内、共通基盤化の補助を行なった笑い (YT, KH による 191-192 行目、YT による 198 行目) と、行っていない笑い (YT と KH による 125-126 行目、KF, MN による 180 行目 -183 行目) を詳察すると以下のことが明らかになった。MN が語った仮説のシナリオへの反応として行われた YT・

KH による 191-192 行目の笑いに対し、MN はその後笑いながら言説のシナリオを継続している。また、YT は 198 行目の笑いに伴って、同意を示す発言「うん」(198 行目)や頷き(199 行目)を行なっている。このように話し手の発言に対して行われる聞き手の笑いが、頷きや同意を示す発言と共に行われ、それに対応して話し手も笑うといった手段により、笑いでの反応が参与者間で相応しいと認められた場合に、聞き手による笑いが理解を示す行為として機能し、共通基盤化の補助となると言える。逆に、YT と KH による 125,126 行目の笑いは、聞き手による理解を示す笑いとして機能するはずであったが、その後の相互行為により YT と KH が十分に MN の発言を理解していなかったことが露呈したため、共通基盤化を補助する笑いとはならなかったと分析できる。このような聞き手による理解を示す笑いが、データ 2 における言説のシナリオへの反応として行われ、それが参与者間の合意に繋がっていたことから、笑いが共通基盤化プロセスにおいての特に phase 3 を補助したと分析できる。

4.2. 言説のシナリオの構築と笑いの共有により強化される共通基盤

本節で扱うデータは、MN が引き続き婚約に至った経緯を語る中で、自身が行った転職活動が話題となり、会話参与者らのこれまでの転職活動や採用面接の経験に基づく立場が表出する場面である。参与者らが持つ転職活動に関する認識が共通基盤として確立し(データ 3)、それが後の言説のシナリオの協働構築と笑いの共有に繋がる(データ 4)様子を、共通基盤化の phase モデル(田中 2019)を用いて分析する。

4.2.1. 転職活動に関する認識の共通基盤化

MN と MN の婚約相手は異なる地方の会社に勤めていたため、MN は婚約以前から勤務地の変更を目指し転職活動を行っていた。結局 MN は、元から勤務する会社内で希望する勤務地へ移動することとなり、実際に転職することはなかった。本場面では MN によるこの話題がきっかけとなり、参与者間で転職活動に関する認識が共通基盤化する場面を分析する。なお、このような経緯から MN は転職活動経験がある他、YT も転職活動及び転職を経験しており、KF は転職活動の経験はないものの人事部に勤めているため採用面接を行った経験がある。KH は転職活動の経験はない。

[データ 3]

350.	MN: その面接が 1 ばん:	phase 1 (350-356 行目)
351.	難しかった [(かもしれん)]	
352.	KH: [ん ::	
353.	MN: まず [転職のりゆう :: を	
354.	[(右手を出しながら親指を折る))	

355.	[₁ ちゃんと言わなあかんし :	
356.	[₁ ((右手をテーブルに置く))	
357.	YT: [₁ ((数回頷く))	
358.	KF: [₂ なんて言ってたん ?	phase 2 (358 行目)
359.	MN: [₂ まだけっ -	
360.	その : 転勤 (.) 結婚したいから :	
361.	(.8) 転勤 (.) を考えてますみたいなの	
362.	それじゃ多分弱いねん	
363.	KF: そやな	
364.	YT: [₃ ((笑顔))	phase 3 (359-381 行目)
365.	MN: [₃ そう	
366.	[₄ その会社じゃないとあかん理由を	
367.	[₄ ((右手でテーブルに置く))	
368.	[₅ 多分ゆって欲しいねんけど :	
369.	[₅ ((右手を自分の方へ振る))	
370.	こっちからしてみたら [ないねん	
371.	KF: [ないよな	phase 4 (MN,KF 間)
372.	MN: [そやねん . ないねん [だから .	
373.	YT: [huhu	
374.	MN: [((KF を指差す))	
375.	なんか勤務地を変えないとあかんので : みたいなんで	
376.	やってたけど : それは全部もうあかんくて :	
377.	KF: そやな . 勤務地はあかん	
378.	MN: そう :	
379.	(2.2)	
380.	MN: それ以外にでも理由が [ほんまにない	
381.	KH: [ない	phase 4 (MN,KH 間)

本場面では MN が自身の転職活動の経験を語っており、当初、MN がなぜ転職のための採用面接が難しかったと述べるのか、参与者間で共有されていなかった。それが、聞き手である KF による質問をきっかけとして、MN の実際の採用面接の経験が明らかにされることで、具体的にどのような点において転職のための採用面接が困難であるか、という転職活動に関する認識が共通基盤として確立されていく。

MN による、「面接が 1 ばん : 難しかった」(350-351 行目)、「転職のりゆう :: をちゃんと言わなあかん」(353, 355 行目) という発言は、phase 1 の話し手の自己中心的な局面であり、この段階で採用面接において転職理由を述べるのが、なぜ MN にとって困難であるのかは他の参与者と共有されていない。そのため KF は、MN が実際に面接で述べ

ていた転職志望理由を尋ねており（358 行目）、ここが phase 2 である聞き手による検索であると分析できる。

これに対する返答として、MN は結婚を機に転職をしたいという自身が面接で述べていた転職の理由を答え（360-361 行目）、その理由が「弱い」（362 行目）と自己評価すると、KF はそれに「そやな」（363 行目）と同意する。続いて MN が、採用面接において説明することが求められる、転職先がその会社でないといけない理由が「こっちからしてみたらないねん」（370 行目）と述べると、それに KF がオーバーラップで「ないよな（371 行目）」と同意する。さらに MN が「それ以外にでも理由がほんまにない」（380 行目）と述べると、今度は KH がオーバーラップで「ない」（KH, 381 行目）と勤務地を変えたいこと以外に面接で述べるような転職理由がないことに同意する。

phase 2 として KF が行なった質問（358 行目）をきっかけとして発生したこれらのやりとり（359-381 行目）は、phase 3 であると言える。MN は質問への返答として、採用されるには十分でない転職理由の具体例や、面接官から求められている転職理由の条件を示しており、MN は話し手として自身の発言を詳細に説明する聞き手デザインを行なっている。また MN の説明を理解したことを示す KF と KH による同意がオーバーラップで行われていることから、この場面での会話が聞き手（KF, KH）の推論・連想などによって共同構築されていると言える。また同時に、これらの 370 と 371 行目、380 と 381 行目で発生しているオーバーラップは秦（2019）が明らかにした共通基盤化の確立を示す同時発話だと分析でき、これまでのやりとりにより、MN がどのような理由で採用面接が大変であると述べているのかを理解したからこそ、MN・KF 間、MN・KH 間でオーバーラップが発生したと言える。これを考慮すると、ここでのオーバーラップは、参与者らが「どのような転職理由が妥当とされているか」、「勤務経験が短い参与者らにとって採用されるような転職理由を挙げること／説明することは難しい」という認識を共有し、転職に関しての共通基盤化が達成されていることを示していると言える。その意味で、370 と 371 行目、380 と 381 行目は phase 4 として共通基盤化の最終局面でもあると言える。

なお、この場面での共通基盤化に転職活動を成功させた経験がある YT は参加していない。この後、本場面で確立された共通基盤が仮説のシナリオの相互構築と笑いの共有に繋がり、phase 4 として共通基盤を強化する様子を次項で分析する。

4.2.2. 仮説のシナリオの協働構築と笑いの共有

本場面ではデータ 3 で共通基盤化された、会社勤務経験が短い参与者らによる転職に関する共有の認識に基づいて、転職活動の際の面接において転職志望理由をどのように説明するかという仮説のシナリオが構築され、笑いが共有される。

[データ 4]

421. KF: =もう今のところでは学びきりました [た
 422. YT: [ahahahaha
 423. KF: hahaha
 424. [やりきりました
 425. KH: [huhuhuhuhu
 426. YT: [¥ 学びきりました ¥
 427. ¥ たかが 2 年でって [言われるわ ¥ahahaha
 428. MN: [¥ そうそうそう ¥
 429. [((数回額く))
 430. [¥ ほんまになってなるよな ¥
 431. KF: [2 年ですかみたいな . はい .
 432. 自分としてはやりきりました .
 433. YT: huhahaha
 434. KF: もっと難しい環境でやりたい
 435. [hahahaha
 436. [((手を口元に当てる))
 437. YT: [hahaha [hahahaha
 438. MN: [hahaha
 439. KH: [huhu
 440. KF: ¥ めっちゃ意識高い [(みたいな)
 441. YT: [ahahahaha

データ 4 では、KF により「採用されるためには面接で転職理由をどう説明すればいいか」という面接場面を描く仮説のシナリオが展開される。抜粋場面以前に開始されたこのシナリオは、421 行目で KF が「もう今のところでは学びきりました」と述べると、それをきっかけに参与者ら全員による笑いや笑いながらの発言が同時多発的に発生し、仮説のシナリオが協働構築される。KF の 421 行目の発言を受けて YT は、「学びきりました」(426 行目) と笑いながら KF の発言を繰り返した上で、「たかが 2 年でって言われるわ ahahaha」(427 行目) と面接場面における面接官としての発言を描く。これに MN もオーバーラップで同意し (428 行目)、「ほんまになってなるよね」(430 行目) と笑いながら発言する。他の参与者らのシナリオへの参加を受けて、KF は「2 年ですかみたいな . はい」(431 行目)、「もっと難しい環境でやりたい」(434 行目) と面接官と転職志望者の発言を描き、さらにシナリオを発展させる。

ここでの笑いは、仮説のシナリオを対象に「おかしさへの反応」(Murata and Hori 2007) として発生したものである。421 行目で KF が挙げた「前職場で学べることは全て学んだために転職を希望する」という転職志望理由が、実際の面接で述べるには非現実的

であることを参与者らが理解し、おかしさを感じたために、シナリオを笑いながら協働で発展させたと言える。仮説のシナリオを非現実的であると認識し、即座に同時多発的な笑いや発言で反応できたのは、参与者らが人事部勤務者（KF）、転職（活動）経験者（YT と MN）、として会話以前から面接場面に関しての「核となる共通基盤」（Kecskés and Zhang 2009）を保持しており、またデータ 3 で参与者らが「どのような転職理由が妥当とされているか」に関して、「創発的共通基盤」（Kecskés and Zhang 2009）を構築していたためである。KH が積極的にシナリオの構築に参加せず、笑いのみで反応しているのは KH に転職や人事部勤務の経験がなく「核となる共通基盤」を保持していないためだと言える。しかしながら、データ 3 で他の参与者らと共に「創発的共通基盤」を構築していたことから、笑いで参加することは可能であったと考えられる。そのため、データ 4 での仮説のシナリオの協働構築と笑いの共有は、データ 3 で構築された転職および面接に関する「創発的共通基盤」に基づいており、特に「核となる共通基盤」を保持していた転職面接の経験を持つ者たちが積極的にシナリオを協働構築したと分析できる。その意味で、ここでの仮説のシナリオが協働構築される場面は、データ 3 で開始された共通基盤化プロセスの最終局面 phase 4 だと分析できる。またここで、データ 3 で共有された「どのような転職理由が妥当とされているか」、「勤務経験が短い参与者らにとって採用されるような転職理由を挙げること／説明することは難しい」という認識が、参与者間でより詳細に明らかにされ共有されていることから、この仮説のシナリオと笑いの共有により共通基盤が強化されていると分析できる。

5. 考察

5.1. 共通基盤化のプロセスにおける笑いの機能

4.1 節の分析から、笑いが共通基盤化を補助する機能を持つことが観察された。データ 1、2 では、「死なれたら困る」という発言を巡る共通基盤化プロセスにおいて聞き手による笑いが冗談や事実としてのおかしさへの反応（Murata and Hori 2007）、共感、理解を示す手段として仮説のシナリオに対して行われることで、参与者間の合意が形成され phase 3 として会話の共同構築を行っていた。また、共通基盤化に繋がらない笑いも観察され、これらは聞き手が話し手の発話を正しく理解していないことが露呈する際に発生するストレスの緩和（Namba 2011）や、理解を示すはずの笑いが、結果的に話し手の発話を十分に理解せずに行われていたことが明らかになった場合に発生していた。これらを考慮すると本データでは、笑いが頷きや同意を示す発言と共に表出される場合や、笑いが後の相互行為において参与者間で相応しい反応として承認された場合に、笑いが参与者間の相互的な理解の達成を補助し、共通基盤化に繋がっていた。

また 4.2. 節の分析から、笑いの共有が共通基盤を強化する機能があることも確認され

た。データ 3 で共通基盤化された「妥当な転職志望理由を勤務経験の浅い参加者らが挙げるのは難しい」という認識に基づいて、データ 4 では仮説のシナリオが協働構築され、笑いが共有されていた。ここでの笑いは、仮説のシナリオの内容に対するおかしみへの反応としての笑い (Murata and Hori 2007) であり、早川 (2000a) で言うところの共通認識に基づく笑いに分類できる。このような笑いが共有されたことにより、「どのような転職理由が面接において妥当であるか」に関する参加者間での認識がより詳細に明らかになり、それを理解し合った上で笑っていることが確認されたために、データ 4 で観察された笑いのプロセスが共通基盤を強化していたと言える。

本研究の分析において観察された共起する笑いについて難波 (2018) は、女性の参加者らによって行われることの多い、協調性を示す行為だとしている。そのため本研究でのデータでは、女性である会話参加者らが、社交上の笑い (志水ほか 1994)、仲間作りの笑い (早川 2000a) に分類される笑いを共有することにより、ある対象への理解度の差異が表出する中で協調を築きながら円滑に共通基盤化プロセス及び仮説のシナリオの構築を行っていたと言える。

5.2. 女性多人数会話における共通基盤化プロセス

4.1 節での分析では下記の図 2 のように、MN の発言「交際相手に死なれたら困ると思った」という発言を理解するための共通基盤化プロセスの内部に、KF の友人のエピソードを理解するための共通基盤化プロセスが発生していた。KF の友人のエピソードが他の参加者らに理解されると、KF は自身の解釈が MN の意味するところと一致しているのかを確認する質問を行う。この質問をきっかけとして、KF が MN の「死なれたら困る」という発言を正しく解釈していなかったことが露呈し、その解釈の誤りを修正するために MN の当初の発言に関する共通基盤化プロセスが再開していた。MN が仮説のシナリオを構築し、状況を詳細に描いたことにより MN が過去に経験した状況が共有され、このシナリオに聞き手である参加者らが理解を示す笑いで反応したことにより、参加者間で合意が構築されていた (共通基盤化を補助する笑い)。これにより、MN が「もし交際相手が死ぬようなことがあったら、それは自分の問題でもある」と考えたこと、婚約を決めたものの「自分と別れたら死ぬというような発言を行う交際相手を面倒であると感じていること」が共通基盤化していた。

4.2 節の分析では、MN がどのような理由から「転職活動が困難であった」と語るのか当初参加者間で共有されていなかったが、共通基盤化プロセスを通して「会社勤務経験が短い者にとって、採用面接で妥当な転職理由を説明するのは難しい」という認識が共有され、「創発的共通基盤」(Kecskés and Zhang 2009) として構築されていた。図 3 のように最初に構築された共通基盤が、その後に発生した仮説のシナリオの協働構築、および笑いの共有に繋がり、これによって共通基盤が強化されていることが明らかになった。ま

た、このシナリオの協働構築に積極的に参加していたのは、転職の際の採用面接について「核となる共通基盤」(Kecskés and Zhang 2009)を会話以前から保持していた参加者らである。これを考慮すると、核となる共通基盤を持っている参加者らが相互行為を通して創発的共通基盤を構築した際に、参加者らが共有する基盤が強固となり、本データのように複数の参加者らオーバーラップを伴いながら行う仮説のシナリオの協働構築が発生したと考察できる。

このような分析により、本研究で観察した女性多人数会話では、共通基盤化、仮説のシナリオの構築、笑いの発生／共有が入れ子式に行われていることが明らかになった。これらの行為が互いに影響を与え合い、それぞれの達成を補助することで、参加者らは互いの発言を理解し合い、円滑に相互行為を行っていた。このような分析から、田中 (2019) による共通基盤化プロセスの phase モデルが有効であったと言える。4 段階の phase を利用した分析により、参加者らが相互的に理解し合うプロセスにおいて、笑いや仮説のシナリオがどの段階で、また何の目的のために行われていたのかを詳察することができた。本研究で観察された共通基盤化プロセスは、話し手が個人的な経験により保持していた認識が聞き手に理解されなかった場面で発生していた。このような話し手の認識は、仮説のシナリオなどの手段で具体的に提示されることで、他の参加者らに共有され、参加者間で創発的共通基盤が確立されていた。

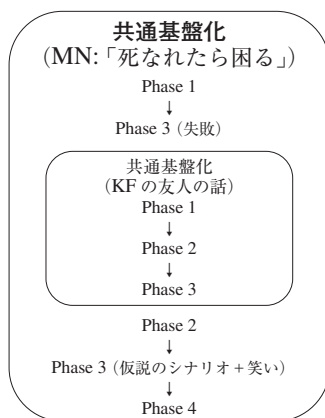


図 2. 4.1. 節での共通基盤化プロセス

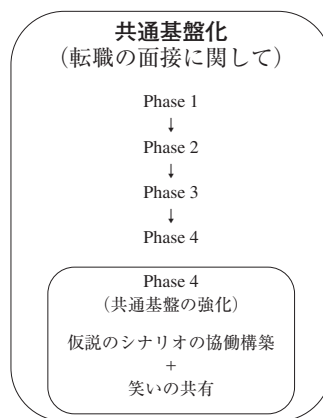


図 3. 4.2. 節での共通基盤化プロセス

6. 結語

本研究では女性多人数会話において、仮説のシナリオの構築とそれに対する笑いでの反応が共通基盤化に繋がる様子を明らかにした。その結果、一部の参加者がある発言を理解していない状態が発生した場合、話し手は仮説のシナリオを用いて説明を行い、それに対

し聞き手は笑いや相槌などで反応を行うことで理解を示していた。このような仮説のシナリオとそれに対する笑いでの反応が、共通基盤化プロセスにおける phase 3 として発生することで共通基盤化の補助を行い、また共通基盤化がある程度構築された後に phase 4 として行われることで共通基盤化の強化として機能していた。このように、参与者間で理解し合えない状態が発生しても、仮説のシナリオと笑いの発生／共有を含む共通基盤化プロセスが行われたことにより、参与者らは円滑にそれぞれの行為を達成し、相互的な理解及び共感を築いていることが明らかになった。

また、4.1 節では KF が行った phase 3 が達成されなかったことをきっかけとして、共通基盤化プロセスが発生していたにも関わらず、その後のプロセスを観察すると MN の仮説のシナリオに強く理解を示していたのは、KF よりも YT と KH である。また、4.2 節では参与者らのこれまでの転職や採用面接の経験の有無により、仮説のシナリオの協働構築への関与の程度が異なり、KH は笑いで反応するのみであった。このように同じ共通基盤化プロセスを経験したからといって、参与者全員が同程度に発言を理解するわけではないことも観察された。このような状況の分析も含め、今後、多人数会話における共通基盤化プロセスとそれに伴う相互行為に注目し、その諸相を解明していきたい。

トランスクリプト記号

[	オーバーラップ記号	¥ ¥	笑いながらの発話	,	音節の区切り
(.)	0.2 秒以下の沈黙	(())	ジェスチャー	?	質問
(0.0)	それ以上の沈黙	:	長音	()	不明瞭な発話
-	言い淀み	=	続けて聞こえる発話		

参考文献

- Bamberg, M. 1997. "Positioning between Structure and Performance. Oral Versions of Personal Experience: Three Decades of Narrative Analysis." *A Special Issue of the Journal of Narrative and Life History* 7, 335–342.
- Bamberg, M. 2004. "Form and Functions of 'Slut Bashing' in Male Identity Constructions in 15-Year-Olds." *Human Development* 47, 331–353.
- Boxer, D. and Cortés-Conde, F. 1997. "From Bonding to Biting: Conversational Joking and Identity Display." *Journal of Pragmatics* 27(3), 275–294.
- Clark, H. H. 1996. *Using Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Georgakopoulou, A. 2001. "Arguing about Future: On Indirect Disagreement in Conversations." *Journal of Pragmatics* 33, 1881–1900.
- Glenn, P. J. 2003. *Laughter in Interaction*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 秦かおり. 2019. 「タスク達成場面における共同行為—折り紙場面を事例に—」、田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝（編）『動的語用論の構築に向けて 第1巻』、47–66、東京：開拓社。

- 早川治子. 2000a. 「相互行為としての「笑い」——自・他の領域に注目して——」、『文教大学文学部紀要』、14(1)、23-43.
- 早川治子. 2000b. 「「笑い」の分類に基づく数量的分析」、『文教大学文学部紀要』14(2)、1-24.
- Holt, E. 2013. "Conversation Analysis and Laughter." In C. A. Chapelle (ed.) *The Encyclopedia of Applied Linguistics*, 1033-1038. Oxford: Wiley-Blackwell.
- 井出里咲子・ブッシュネル ケード. 2018. 「Melting the ice: 初対面会話における共鳴現象としての笑いの機能」、村田和代（編）『聞き手行動のコミュニケーション学』、241-262、東京：ひつじ書房.
- Kecskés, I. and Zhang F. 2009. "Activating, Seeking, and Creating Common Ground: A Socio-cognitive Approach." *Pragmatics and Cognition* 17(2), 331-355.
- 児島麦穂. 2019. 「笑いの相互行為性—多人数会話における不均衡状態から笑いの共有に至るプロセス—」、『社会言語科学会第43回大会発表論文集』、66-69、社会言語科学会.
- 三宅和子. 2011. 「談話の中の「笑い」と話者の内的フットイング—スクリプトにない「笑い」の出現を手がかりに」、『文学論藻』（東洋大学）85、134-116.
- Murata, K. and Hori, M. 2007. "Functions of Laughter in Intercultural Communication: An Analysis of Laughter as Communicative Strategy." 『国際社会文化研究紀要』9、115-124.
- 中河 伸俊. 2016. 「談話標識としての笑いとお笑い——フレーム分析の実用のための試行的検討——」、『同志社社会学研究 NO. 20』、1-17.
- Namba, A. 2011. *Listenership in Japanese Interaction: The Contributions of Laughter*. Doctoral Dissertation, The University of Edinburgh.
- 難波彩子. 2018. 「男女の会話の共創 リスナーシップとアイデンティティ」、村田和代（編）『聞き手行動のコミュニケーション学』、209-240、東京：ひつじ書房.
- Sacks, H. 1974. "An Analysis of the Course of a Joke's Telling in Conversation." In R. Bauman, and J. Sherzer (eds.). *Explorations in the Ethnography of Speaking* 337-353. Cambridge: Cambridge University Press.
- 志水彰・角辻豊・中村真. 1994. 『人はなぜ笑うのか』、東京：講談社.
- 田中廣明. 2019. 「指示解決—自己中心性と共通基盤化—」、田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝（編）『動的語用論の構築に向けて 第1巻』、18-46、東京：開拓社.
- 山口征孝. 2019. 「指示解決の動的語用論—リングフランカとしての英語使用における共通基盤化の事例—」、田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝（編）『動的語用論の構築に向けて 第1巻』、88-98、東京：開拓社.